

市街地高層住宅の洗濯物干場の問題

著者	町田 玲子
雑誌名	京都府立大学学術報告. 理学・生活科学・福祉学
巻	21
ページ	55-60
発行年	1970-10-29
URL	http://hdl.handle.net/2297/11026

市街地高層住宅の洗濯物干場の問題

町 田 玲 子

Problems of drying spaces at the high apartment house in the city area

REIKO MACHIDA

京 都 府 立 大 学 学 術 報 告

理学・生活科学・福祉学第21号別冊

昭和45年10月発行

市街地高層住宅の洗濯物干場の問題

町 田 玲 子

Problems of drying spaces at the high apartment house in the city area

REIKO MACHIDA

市街地高層住宅における洗濯物干場の問題が、居住者の日常生活に大きな影響を及ぼしていると思われるにもかかわらず、居住者の立場からは、ほとんど検討されていない現状である。そこで、公団賃貸の場合の洗濯物干場の現状、及び、洗濯物等の乾燥方法の今後の方向について、調査研究を行なった。

その結果、共同設備である屋上の共同物干場は、雨風など自然による被害、または、人為的な被害をうける心配が常にあり、「便利である」とは、ほとんど思われていない。日光や風などによる自然乾燥にかわる方法として、大型乾燥機の共同利用による方法に対する意識をみると、「利用したいと思う」と答えたのは、30%足らずであった。しかし、その賛成者層についてみると、学歴が高くなるにつれて、又、家族人数が減少するにつれて増加し、勤めている婦人の占める割合が、最も高いことがわかった。

I 緒 言

共同住宅では、一戸建の住宅の場合とは、また異なる生活の方法が要求される。最近では、共同住宅も一般化し、それに適した生活方法も次第に居住者の間で、体得されていっているかにみえる。

しかし、共同住宅の中でも、市街地にあり、かつ、建物が高層で、エレベーターが、日常使用されている、いわゆる市街地高層住宅においては、まだ建設され始めて歴史も浅く、生活上の問題が、種々の点で現われている。

日常生活には不可欠である洗濯物等の乾燥の問題もその一つである。すなわち、市街地という環境ゆえに、公害の影響、景観上の問題は無視できず、また高層の共同住宅という住宅形式上、家事労働にもたらす影響も大きいといえる。

したがって、日常的であるにもかかわらず、軽視されがちなこれらの問題点を明確にし、居住者の生活への配慮が、なお薄い住宅供給のされ方を指摘することは、今後の市街地高層住宅における生活向上のためにも重要なことであると思われる。

本研究では、市街地高層住宅の洗濯物干場の利用状

況、ならびに利用上の問題点を明らかにすると共に、市街地高層住宅での洗濯物等の乾燥について、今後のあり方を検討することを目的として、調査を行なったので、その結果を報告する。

II 調査方法

調査対象者は、市街地高層住宅に居住する主婦とした。すなわち、大阪市内にある公団賃貸の森の宮住宅(以下、森の宮とする)、および住吉市街地住宅(以下、住吉とする)を調査対象住宅地とし、①居住歴、1年以上、②2寝室住戸に居住、③南向でない住居に居住、を選定条件として、その適応住戸(森の宮648戸、住吉484戸)から、各々260戸、240戸、計500戸を無作為抽出し、その主婦に依頼した。

調査は、アンケート用紙を配布し、2~3日後に回収する、本人記入のアンケート調査を行なった。

回収率は、各々、96%、89%で、平均92%である。

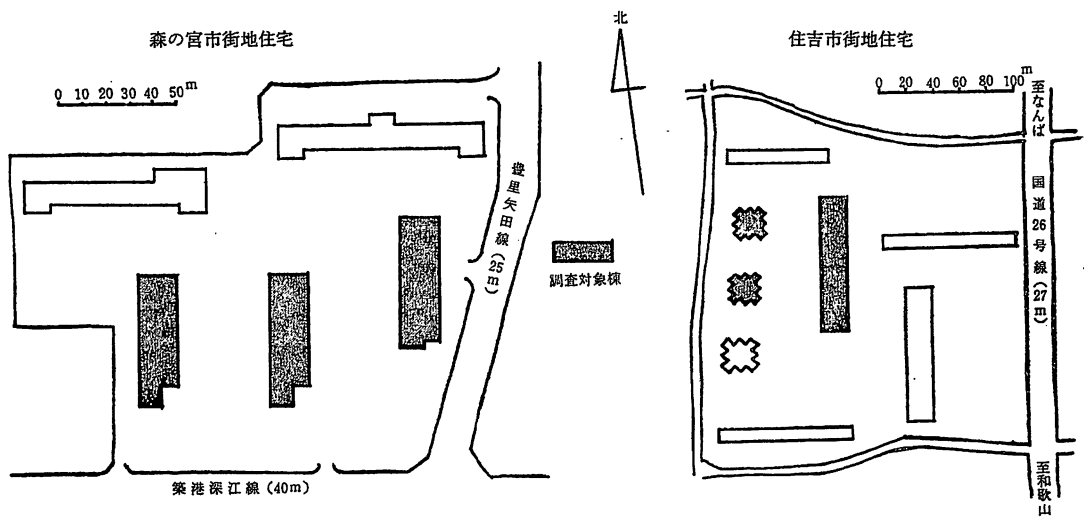
調査期間は、1969年11月1日から、2週間である。

III 調査結果

(1) 調査対象の概要

調査対象住宅地の配置図は、図1に示す通りである。

図1 調査対象地・住宅配置図



調査対象住戸の居住者については、図2～図6に示す通りである。他の一般団地に比べ、市街地高層住宅では、収入、職業の点で、特異性がみられる。妻の有職率は、森の宮約16%、住吉約12%であるが、内職、パートタイムの職も含めると、さらに高率になると考えられる。

永住意志に関する質問は、とくに設けなかったが、移動がはげしいことが、居住者や管理者の口から伺えた。洗濯物干場の設備状況が、両団地で異なっている。す

図2 月收入(税込)

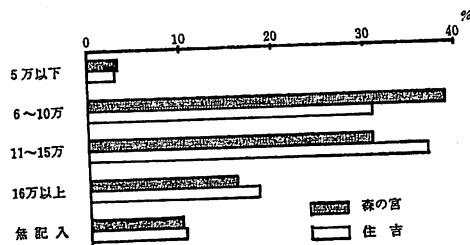


図3 家族構成

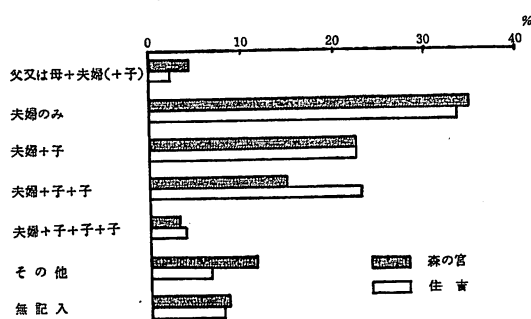


図4 夫妻の年齢構成

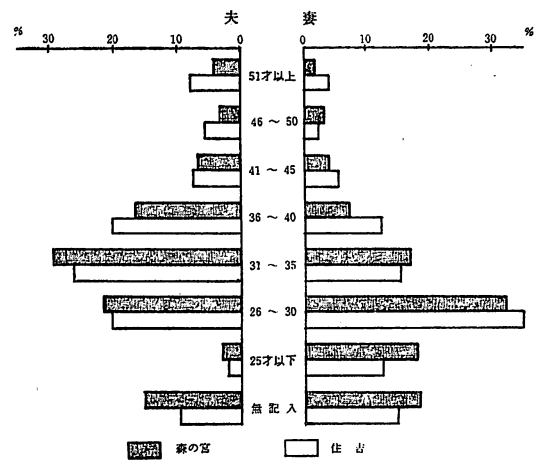
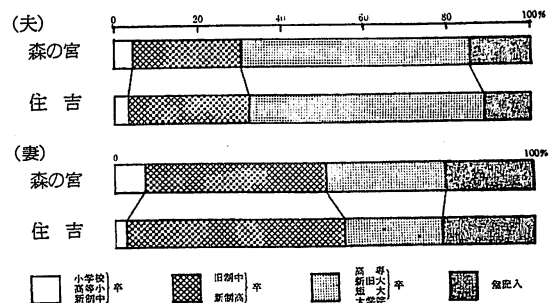
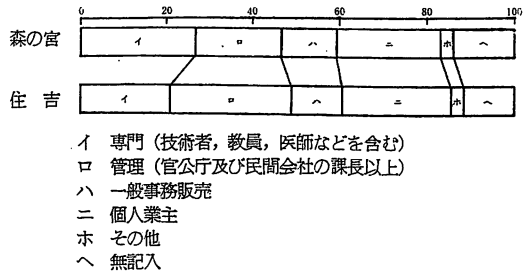


図5 学歴



なわち、屋上物干場は両団地共あるが、さらに各戸の干し場が、森の宮では、サンルームと称する場所で屋内にあり、住吉では、屋外にあるベランダがそうである。

図6 夫の職業



(2) 洗濯物干場の利用状況

図7に示すように、サンルーム、またはベランダの利用が最も多い。屋上の共同物干場は、森の宮で50%に達せず、住吉で10%足らずである。その他、森の宮では、「窓の外」と答えている者が比較的多い。この方法は、窓の外側にはり出しているコンクリート造りの目隠し用の出張りに、物干用ハンガーをぶらさげて干すもので、危険等の理由で、公団側からは、何度か禁止令を出しているが、守られていない現状である。

(3) 屋上の共同物干場の問題点

屋上物干場の便、不便については、図8に示すように半数近くが、「不便である」と答えている。

不便な点の主なものは、図9に示すように、「監視が十分行届かない」ほど自宅から離れていることによる不便さが最も大きく、また「共同で干す」という点より、「屋上という場所」に対して、より不便を感じていることがわかる。

屋上という場所の使用に関し、住吉では、調査時の頃から、風紀上、注意令が出されている。つまり、住吉では、各戸にあるベランダが現状の物干場として、比較的便利であるため、不便な屋上の利用者が少なく、それがかえって、洗濯物だけでなく、主婦自身に対してまで、不用心な場所となってしまったわけである。

屋上の共同物干場は、日光と風による乾燥、すなわち自然乾燥の場であるが、空気汚染による洗濯物への影響は、その高さゆえに比較的少ないと思われる。しかし、家事労働上からみると、問題がいろいろある。

① 雨風による被害、および人為的な被害の心配がある。物干しの出来る洗濯物が制限される。すなわち、

図7 洗たく物干場として、どこを利用しているか

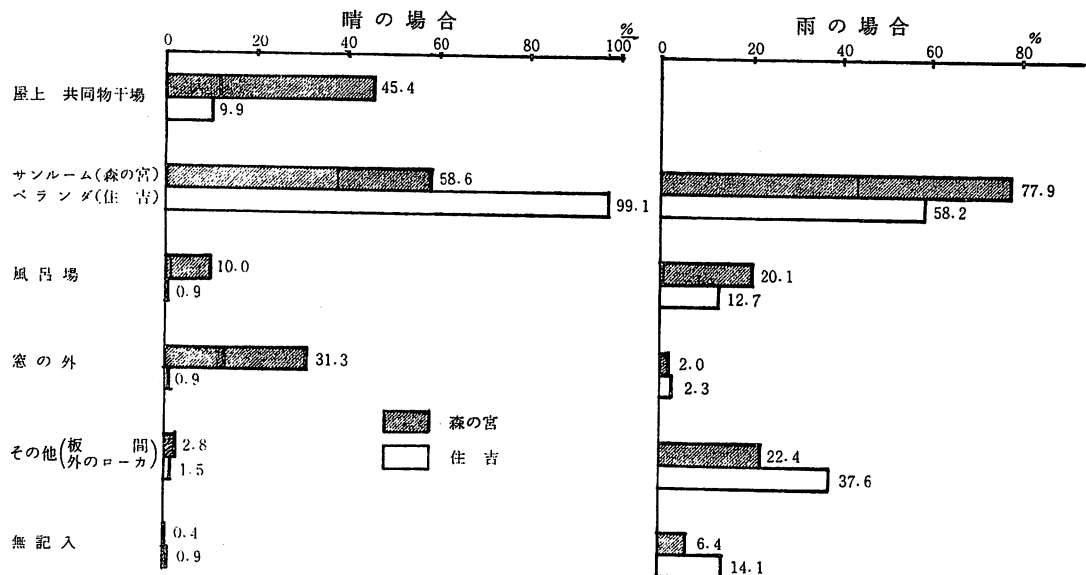


図8 屋上の物干場の便・不便について

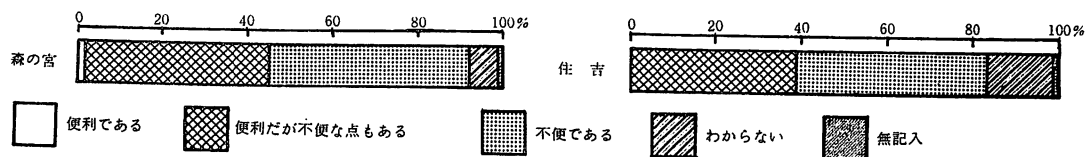
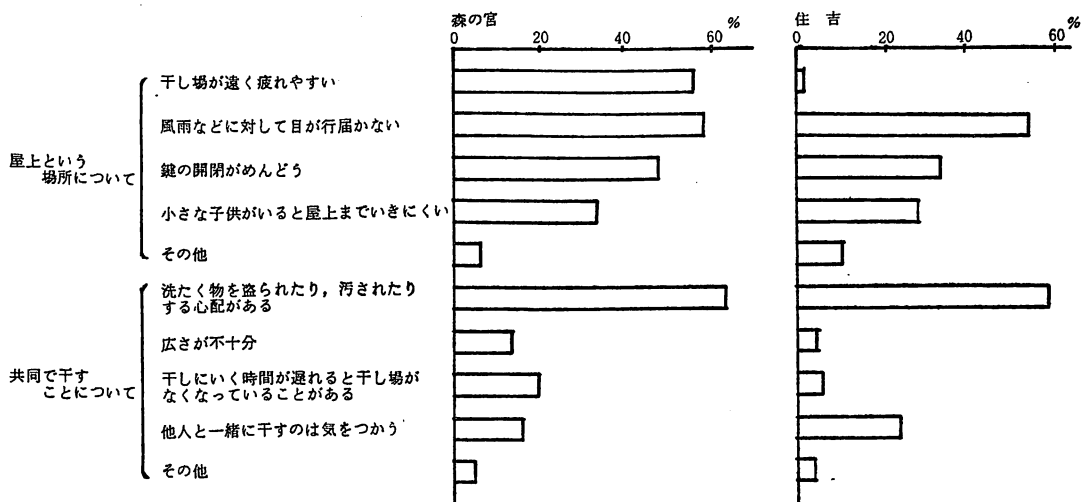


図9 屋上の共同物干場の不便な点



高価なもの、婦人用下着等は干せない。

② 洗濯物運搬の労働負担が大きい。

自宅のドアの戸締まり、屋上への出入口と物干場の柵内への出入口の鍵の開閉という余分の動作が伴うので、より負担が大きくなる。

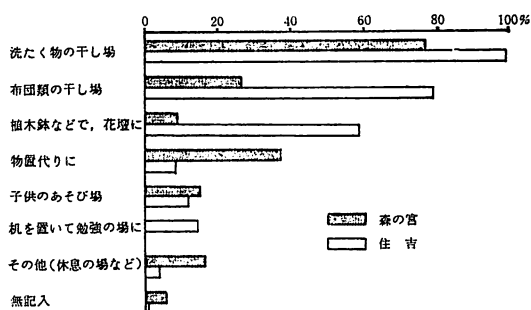
③ 設備が不十分である。

とくに、布団類の乾燥に対する配慮が全くない。また小さい子供をもつ主婦は、当然子供を連れてくるが、乳母車に対する配慮が全くない。

(4) 各戸の物干場の問題

サンルーム、またはベランダは、物干し専用の場として設置されているわけではないが、実際には、主に干し場として利用されている。(図10)

図10 ベランダ又はサンルームの使い方

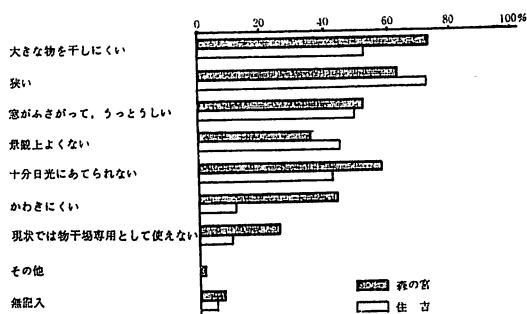


しかし、その機能があいまいな為、図11に示す通り、問題がいろいろある。

① 他機能と兼ねざるを得ず、狭い。

巾半間、長さ1間～1間半の広さであるが、大きな

図11 ベランダ又はサンルームを物干場として使用する場合の不便な点



物は干しにくく、又、動作もやりにくい。とくに、サンルームの場合、それが著しい。

② 居室に与える影響が大きい。

すなわち、暗くなり、風通しが悪くなる。見晴らしも悪くなる。

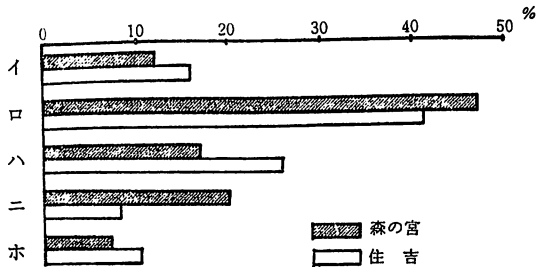
③ サンルームの場合、日光が十分あたらず、風通しも悪い。健康的な干し方がのぞめない。

(5) 洗濯物等の乾燥の今後の方向

図12において、イ・ロ・ハは、共同利用の方法であり、ニは、戸別に処理する方法である。また、イは、機械による人工的な乾燥方法を取り、ロ・ハは、自然乾燥の方法をとるものである。

イと関連させて、さらに「共同乾燥機があれば、利用したいと思うか」という質問を設けたところ、約3分の2までが、「利用したくない」と答えており、(図13)、その主な理由として、「共同で使うのがわずらわしい」

図12 屋上の共同物干場の今後の方向

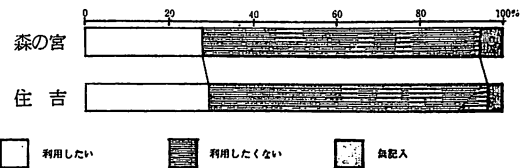


- イ 自然乾燥によらずに性能のよい大型乾燥機を、共同設備として設けるなど機械乾燥の方向をとるべきである。
 ロ 日光などで、自然に乾燥させる方法でよいが、現状の場所、利用方法などを改良すべきである。
 ハ 現状のままでよい。
 ニ 共同で利用するのではなく、各戸で処理する方向をとるべきである。たとえ家の中がますます狭くなつても、経済的負担がふえても、それは仕方がない。
 ホ 無記入

が、大半を占めている。

しかし、イの態度をとる者についてみると、少数ではあるが、家族人数、妻の学歴、妻の職業の有無と多少関連がある点、注目される。(図14～図16)

図13 共同乾燥機が当団地にあれば利用したいと思うか



Ⅳ 考 察

現状では、共同施設としての屋上物干場が不便であるため、各戸処理が主になっている。しかし、現在の住宅事情を考えると、とくに、市街地高層住宅の場合、サンルーム、またはベランダは、本来の居住性を向上させる利用のしかたを行ない、洗濯物等の乾燥は、主に、合理的な共同化方法によって処理することがのぞましい。

自然乾燥の方法をとる屋上洗濯物干場の場合、現在では、単に場所を提供しているにすぎず、利用者の立場は、ほとんど無視されているといえる。

乾燥機等を使用する人工的な乾燥の方法が、共同住宅が古くからある欧米でとられているが、日本では、まだ

図14 家族人数と屋上物干場の方向

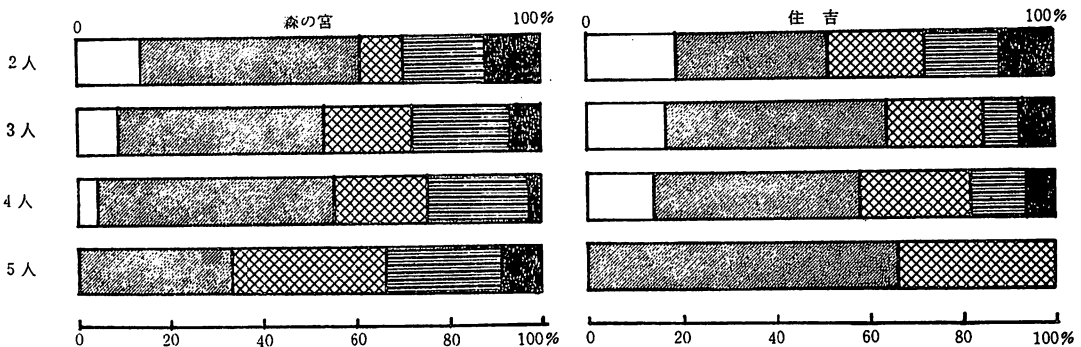


図15 主婦の学歴と屋上物干場の方向

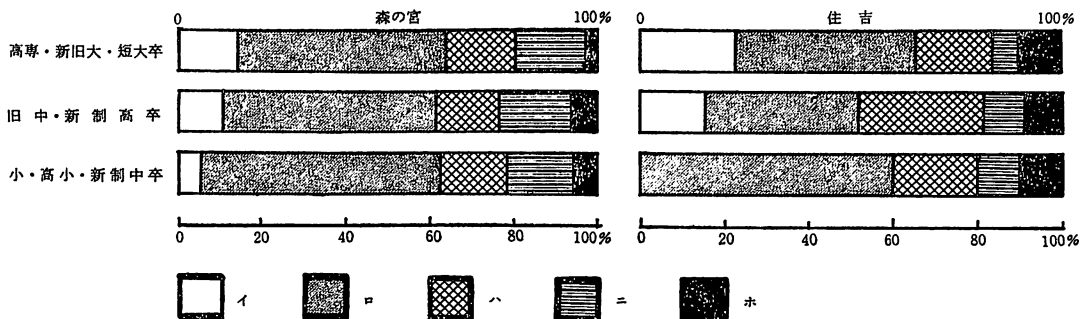
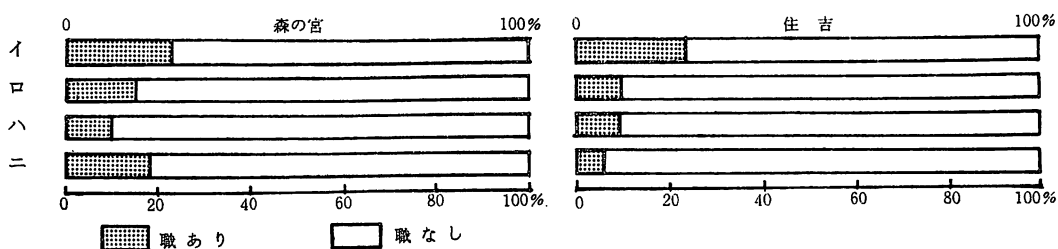


図16 主婦の職業の有無と屋上物干場の方向



実例が少なく、それに対する意識も低いことが、調査結果で明らかとなった。

しかし、機械乾燥の賛成者層に妻の有職率が最も高い点、又、学歴が高くなればなるほど、家族人数が減少すればするほど、賛成者が増加している傾向がある点、および調査時に、この方法を以前経験した主婦数人から、この方法の便利さを強調する声が聞かれた点等を考え合わせると、共同利用による機械乾燥方法は、今後、発展する可能性が考えられる。

V 結 語

市街地高層住宅における洗濯物干場は、現状では、居住者にとって多くの問題点がある。すなわち、屋上の共同物干場は、①洗濯物類に対しても、物干しを行う人に対しても安全な場所ではない。②洗濯物運搬等に伴う労力負担が大きい。③設備が不十分で利用しにくい。等があげられる。また、各戸の物干場であるサンルーム、またはベランダは、①狭い ②居住者をうっとうしくさせ

る ③サンルームの場合、日あたり、風通しが悪く、乾きにくい。等が、主にあげられる。

このような多くの問題点があげられるにもかかわらず、その対策に対しては、現状を一部改良する方向を望む声が高く、機械乾燥による方法に対しては、かなり消極的である。しかし、共同住宅、とくに市街地高層住宅の増加、家族構成員の減少化、主婦の意識の向上、仕事をもつ主婦の増加等の社会現象の今後の方向を考えると、洗濯物等の乾燥は、合理的な方法、たとえば、機械乾燥の方法等による共同化を推し進めていくべきであると思われる。

謝 辞

本調査を計画、実施するにあたり、始終御懇篤なる御指導を賜りました奈良女子大学教授、扇田信先生、並びに助教授、足達富士夫先生、そして、共に調査を行いました奈良女子大学卒業生の蔵田啓子さん、中迫小杉さんに深く感謝いたします。(1970年7月31日受理)